



花だより 鳥だより



ポロト案内舎 2021年 6月 114号

暑くなったり、寒くなったり、目まぐるしく変わる6月の気温。網戸は出したが、扇風機はまだ。電気ヒーターは出したまま。中途半端な感じです。寒い日が続いても草は伸びます。緑の海に飲み込まれる前に、草刈りに励む日々です。



ポロトのツル



6月にはヒナが孵ると期待していましたが、いまだ抱卵中です。無精卵の可能性が高くなりました。

昼間はオスが巣にこもり、夕方にメスと交代。そして翌朝はまたオスと交代。こんな単調な日々を5月からずっと繰り返し、2か月近くがたちました。変化が欲しかったのでしょうか？ある日の夕方、抱卵を代わったばかりのオスが、案内舎の庭にやって来ました。珍しそうにあたりを見回しながらも、警戒しつつ庭を歩き、さっと飛び去りました。



ポロトの花たち



花の湿原と呼ばれる多布湿原ほどの華やかさはありませんが、ポロトの湿原とその周辺にも可憐な花が咲き始めました。代表格は、氷河時代の生き残りといわれるクシロハナシノブとフタマタイチゲ。イチゲの仲間にしては大ぶりのフタマタイチゲは、遠くからでも白い花が目立ちます。しかし、クシロハナシノブは、高い草に隠れるように咲いているので、場所がわからないとなかなか見つけれません。乾いた場所でも元気よく花を咲かせるフタマタイチゲと違い、クシロハナシノブは湿原の湿った場所を好みます。でも、足元が濡れているのは嫌いなようで、ちゃっかり、やちぼうずを植木鉢代わりにしています。



湿原の中、ミズゴケで覆われた場所には、イソツツジが白い花をたくさん咲かせています。周囲の草より背が低いのですが、イソツツジはれっきとした木です。小さくても樹齢数十年というものも珍しくありません。栄養の少ない湿原では、小さいほうが生きるのに有利なのです。

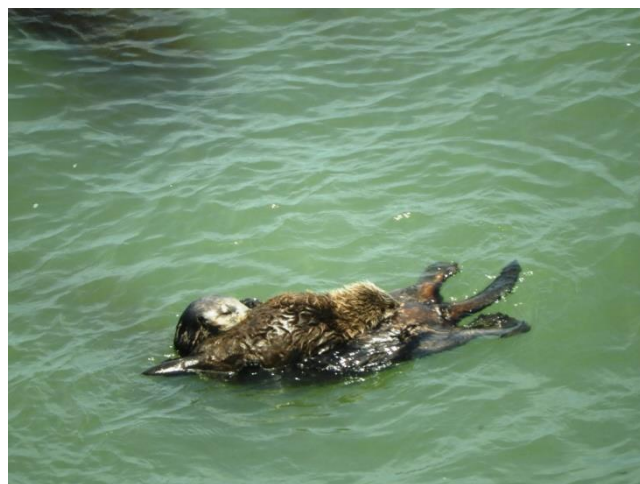
湿原の周辺には、ハマナスの赤い花が鮮やかに咲いています。近づいて鼻を向けると、バラの甘い香りが漂います。ポロトの涼しい気候は、よほどハマナスの生育に適しているようで、案内舎の庭にも自生しています。いつの間にかに芽を出して、気が付けばグングン大きく育っています。きれいな花を咲かせるものだから、刈り取るのが惜しく、無計画に増殖しています。



岬のラッコ親子

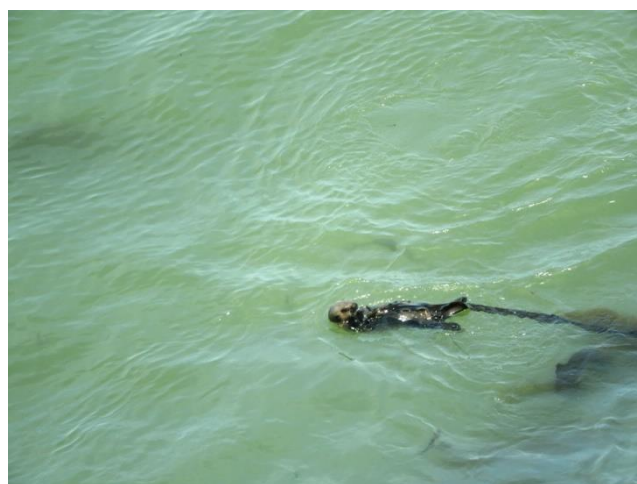


獲物を探しに母親が水中に消えました。子どもはぷかぷか浮かんでいます。親がいなくなっても不安がる様子はなく、お気に入りの昆布を齧ったままです。すぐに戻ってくると知っているから安心なのでしょう。よほどこの昆布が気に入ったようで、なかなか放しませんでした。



子どもが満足すると、ようやく自分の毛づくろいを始めた母親。親の隣に浮かんでその様子をじっと眺めている子ども。親のしぐさを見ながら、毛づくろいのやり方を覚えていくのでしょうか。食べ物の見つけ方、敵から身を守る方法など、親と過ごす短い間に子どもが覚えることはたくさんあります。

霧多布岬でラッコの親子を見つけました。母親が食事の間、子どもは隣に浮かんで昆布を齧って遊んでいます。子どもは瞬く間に大きくなります。ちょっと見ないうちに、母親の半分くらいの大きさに成長していました。後ろ足が大きいのは驚きます。水を掻いて泳ぐのに適した体のつくりです。海で生きていく機能が幼いうちから備わっているのですね。



母親の食事が終わると、今度は子どもの番です。親の上によじ登り、足の付け根にある乳首に吸い付きます。親は乳を与えている間、子どもの毛づくろいしています。寒い海で生き抜くためには、絶えず毛皮の手入れが欠かせません。毛の間に空気を貯め、体温で温め、寒さを防ぎ、さらに浮力を得ます。まだ子どもは毛づくろいできないので、親が面倒を見てあげます。





シロの木、クロの木



シロとクロが亡くなってから2年が経ちました。彼らはドッグランがあった場所で、木の下に眠っています。シロとクロが死んだら、樹木葬にしようと決めていました。この木は、実生から育てたダケカンバです。

左側がシロの木、右がクロの木です。彼らの体が土に還り、その栄養を吸収して、木が育っていきます。シロの木は、去年の秋、シカに角研ぎされて樹皮がはがれ、少し元気がなくなっていました。が、大丈夫のようです。クロの木は元気に枝葉を広げています。この場所は、海からの冷たい風



が左から吹いてきます、シロの木がクロの木を守ってあげる格好になりました。犬たちが生きているときと同じになったなと感じています。この木々を見ると、シロとクロがこの場所で走り回っていた光景がよみがえってきます。見上げるような大木に育ってほしいと思います。